

湯〜ねつと

いのち輝く



田園風景のアキアカネ (撮影者 早坂 祐美子)

A Hospital surrounded by beautiful Nature (美しい大自然に包まれた病院)

JCHO 登別病院の方向性について

副院長 横山 豊治

当院は本年4月より「独立行政法人地域医療機能推進機構、Japan Community Health care Organization 略称 JCHO、ジェイコーと読みます。」の一員となり「JCHO登別病院」として、井須和男新院長の指導のもと、地域医療、地域包括ケアの要として超高齢化社会における地域住民の多様なニーズに対応し、生活を支えるというJCHOとしての使命を実現すべく、病院の改革をすすめています。

当院の方針としては、急性期病院での脳血管障害や内科疾患治療後や術後、当院での整形外科術後等のリハビリテーションを中心に、整形外科疾患や内科疾患の急性期、慢性疾患の急性増悪などの病態に対し、地域の医療機関と連携をとり、当院で治療可能な範囲となりますが、対応していきたいと思えます。また、入院診療以外でも、訪問診療や訪問看護、訪問リハビリ、通所リハビリ、健診事業や地域包括支援センター（総合福祉センターしんた21に事務所を開設）での活動やそのほかの健康推進活動に力を入れているところであります。

当院の内部事情として、内科医の退職や、応援医派遣の中断があり、内科医不足の状況が続いており、地域医療のニーズに応えるためには、早急な内科医充足が必要と思われ、特に、総合診療の可能な一般内科医や循環器内科医、健診事業を行っていただける消化器内科医、リハビリテーション科医を募集しておりますが、大学病院や関連病院、JCHO内の他の病院にも依頼し交渉中です。薬剤師も不足しており、

確保は難しい状況です。

8月30日、厚生労働省医政局長二川一男氏が当院を訪問されました。当院の概略と状況を説明し、院内を視察していただきました。

二川医政局長からは、今後、JCHO内でのスケールメリットが生かされ、医師や薬剤師等の不足が解消されることを期待しますとのことでした。また、当院のように、リハビリテーションを中心とした病院は全国的には、まだまだ少なく、急性期病院での治療後、自宅復帰や社会復帰するため、患者さまが困らないよう、当院の様なリハビリテーション中心の病院を増やしたいと考えているとのことでした。

当院の回復期リハビリテーション病棟では、各療法士が365日リハビリを行っており、通所リハビリや訪問リハビリにも力を入れており、理学療法士、作業療法士はまだ、不足している状況です。今後、リハビリテーションを強化し、内科医や薬剤師の充足に努め、地域の皆様に信頼され、お役にたてる病院になれるよう努力していく所存ですので、これからもよろしくお願い申し上げます。



執務中の横山副院長。

栄養管理についてのお話

～経静脈栄養法～

外科部長 中 村 誠 志

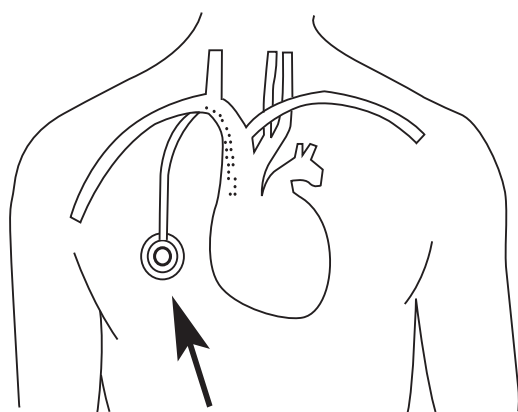
栄養管理の方法と聞いて、皆様は何を思い浮かべるでしょうか？食欲がなく食べられない時には、点滴による治療が行われることが多いので、まず点滴を考えられた方が多いと思います。

その点滴の方法にも幾つかの種類があります。短期間の一時的な点滴であれば、手や足の静脈（末梢静脈）に針を留置して行う**末梢静脈栄養**が選択されます。しかし、長期間（約14日間以上）にわたる点滴管理が必要な場合や、末梢静脈から投与できない濃度の高い（高カロリー）輸液製剤の投与が必要な場合には、中心静脈と呼ばれる、より心臓に近い太い静脈（鎖骨下静脈や大腿静脈など）にカテーテルを挿入・留置しなければなりません。これを**中心静脈栄養**と呼びます。

末梢静脈栄養は外来でも簡単に行うことができますが、およそ72時間毎に血管内留置針の交換（刺し換え）を行う必要があります。患者様にも負担をかけてしまいます。一方で、中心静脈栄養では、絶食管理中でも十分に栄養を補給できる高カロリー輸液製剤の投与が長期間にわたり可能となりますが、カテーテル挿入・留置の手技は、重篤な合併症（気胸・血胸、動脈誤穿刺など）のリスクを伴うため、十分な安全対策を講じた上での処置が必要です。更に、カテーテルに関連する感染合併症が全身に波及することもあるため、清潔な操作が必要で、その管理は多少煩雑なものとなってしまいます。

中心静脈栄養を安全に（感染合併症

リスクを低く）、より長期間行う方法として、ポートと呼ばれる小型のタンクを皮下に埋め込み、カテーテル自体も皮下を通してこのポートと接続する、**皮下埋め込み式中心静脈栄養ポート**による管理法があります（図矢印）。



点滴が必要な際は、このポート部に針を留置しますが、点滴が要らない時には針を抜いてしまいます。カテーテルやポート自体も露出していないので、入浴も可能となりますのです。皆様、イメージできましたでしょうか？

輸液製剤の進歩、点滴管理のためのデバイスの進歩により、これら静脈栄養法は、より安全に簡便に行えるようになりましたが、決して生理的な栄養摂取方法ではありません。近年、腸から栄養を摂る**経管栄養法**が、単なる栄養管理としてのみならず、治療としても注目されております。経管栄養法のお話は、また次の機会に。

高校生一日看護体験

副看護部長 小林 貴美枝

8月7日、恒例の「高校生一日看護体験」が行われました。今年は、室蘭栄、室蘭清水丘、苫小牧東、苫小牧南の4高等学校から各2名、計8名の参加がありました。

最初に看護部長より、病院の概要や看護師の仕事について説明があり、その後、3病棟に分かれて緊張の看護体験が始まりました。2時間30分という短い時間ではありましたが、病棟の看護師に説明を受けながら患者様の手や足を洗ったり、シャンプーをしたり、更衣のお手伝いをしたりと、むし暑い中、皆、汗をかきながら患者様と関わっていました。初々しい白衣の天使の前に、患者様のお顔もほころんでいました。

午後は院内見学の後、懇談会を行いました。一日看護体験への参加動機は、参加者全員が看護師を志望しているためということでした。午前中の看護体験については、看護師に対して抱いていた点滴や処置をしているイメージと

は違い、介護の業務や力仕事が多いということが分かったという感想が多く聞かれました。また、初対面の患者様とコミュニケーションをとることの難しさも体験したようでした。

昨年度より病棟看護師が減っており、高校生への対応も厳しい状況を鑑み、受け入れ高校生を昨年度の半数とし、懇談会も指導者を交えず看護部のみで対応しました。準備や後片付けを含め、受け入れ病棟の負担を最小限にした今年度の高校生一日看護体験でしたが、参加者からは大変満足というアンケートへの回答をいただき、私たちも安堵することができました。ご協力いただいた総務企画課の方々、病棟看護師の方々に感謝いたします。



患者さまと初めて関わります。



恒例の集合写真。

医療福祉相談室とは

MSW（メディカル ソーシャル ワーカー） 柳 田 峰 子

医療福祉相談室では、治療や入院に伴って生じる不安や問題の相談に応じしており、相談に応じる専門の職員を、医療ソーシャルワーカー、MSW（メディカル ソーシャル ワーカー）と呼びます。現在、当院の医療福祉相談室では3名の医療ソーシャルワーカーが相談に乗らせていただいております。医療福祉相談室の場所は、2号棟2階の端にあります。なかなか見つけにくい場所かもしれませんので、その際は職員へ声をかけてくださればご案内します。

相談は、入院されている患者様ご本人、ご家族、通院されている方を始め、関連機関などから受けています。実際にお会いして相談を受ける場合と電話で相談を受ける場合があります。お会いして相談を受ける際は、基本的には医療福祉相談室にあります面接室でお話をうかがいます。入院されている場合は、病棟にあります面接室でお話をうかがうこともあります。

医療ソーシャルワーカーは、相談内容に応じて医師、看護師、リハビリスタッフなどの院内スタッフへ病状や今後の見通しを確認し、時にはご本人、ご家族に代わってスタッフへ思いの代弁を行います。また、年齢、身体状況に合わせて活用できる社会保障制度（介護保険、身体障害者手帳、難病の方の事業など）の提案を行います。在宅生活においての関係機関との調整及び施設入所や転院に向けた地域情報の紹介と各関係機関との連携などを通し、安心した生活を送れるよう支援させていただきます。

些細なことでも、困ったことがあればお話をうかがい解決方法を一緒に考えご支援いたします。まずは、医療福祉相談室へ足をのばしてみてください。



2号棟2階にあります。



相談室内。

徘徊模擬訓練の様子と介護の日ご案内

登別市地域包括支援センターゆのか・主任介護支援専門員 菊池 豪

7月10日(木)、小雨の降る中、登別市SOSネットワークシステムを活用した初めての「徘徊模擬訓練」を実施しました。このネットワークシステムは、徘徊による行方不明者の情報を自治体独自のネットワークでいち早く発信し、早期発見・保護することを目的としています。当日は、協力機関となっている機関や団体、個人の方々にFaxによる一斉の情報提供を行い、発見後は登別市役所への連絡、行方不明者の保護等について訓練をしてもらいました。徘徊者役は、当包括支援センターの男性職員です。白いワイシャツに黒いズボン、ビニール傘を持って市内を歩き、容姿の特徴が記載されたFaxによる情報提供の書類を手を持った搜索協力者の方々に声を掛けていただきました。その際は、声掛けのポイントや連絡体制のアドバイス等、実際のネットワークシステムの活用について説明をしながら訓練を行いました。

訓練後は、協力機関の方々にアンケートをお願いし、システム活用のご感想やご意見を伺いました。この結果は、登別市役所担当部署と円滑なシステム運用につながるよう協議していきたいと考えています。当日、協力いただいた皆さん、ありがとうございました。



模擬訓練の一コマ。

「介護の日」

—地域で自分らしく 元気に暮らそう!—

11月11日(火)に、市内3か所の会場で、「介護予防」に関する催物を行います。
すべて参加費無料です。
時間と場所を確認の上、気軽にお越しください。

日時	会場	主催
平成26年11月11日(火) 10:00~12:00	登別市民会館	登別市地域包括支援センター ゆのか ～今日からあなたも「イキイキ美人」～
平成26年11月11日(火) 13:00~15:00	登別市婦人センター	登別市地域包括支援センター あけぼの(愛称) ～小さな変化が大きなチカラ!～
平成26年11月11日(火) 10:00~12:00	特別介護老人ホーム わかさ	登別市地域包括支援センター わかさ ～楽しく元気に介護予防～

【日時】平成26年11月11日(火) 10:00~12:00

【会場】登別市民会館

【主催】登別市地域包括支援センター ゆのか

～今日からあなたも「イキイキ美人」～

- 表情イキイキの口腔体操 講師 佐藤 孝子氏
- 「イキイキ美人」の栄養学 講師 佐藤 孝子氏

こんな方に勧めます
① 歯が抜け、噛むのが難しくなった。
② 食事の量が減ってきた。
③ 体重が減ってきた。
④ 毎日を前向きに過ごしたい。

【日時】平成26年11月11日(火) 13:00~15:00

【会場】登別市婦人センター

【主催】登別市地域包括支援センター あけぼの(愛称)

～小さな変化が大きなチカラ!～

- 「認知症サポートあれこれ」 中村 孝子氏
- 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏
- 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏

こんな方に勧めます
① 認知症の予防や対応が気になる。
② 認知症の予防や対応が気になる。
③ 認知症の予防や対応が気になる。
④ 認知症の予防や対応が気になる。

【日時】平成26年11月11日(火) 10:00~12:00

【会場】特別介護老人ホーム わかさ

【主催】登別市地域包括支援センター わかさ

～楽しく元気に介護予防～

① 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏

② 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏

③ 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏

④ 「認知症予防あれこれ」 中村 孝子氏

こんな方に勧めます
① 認知症の予防や対応が気になる。
② 認知症の予防や対応が気になる。
③ 認知症の予防や対応が気になる。
④ 認知症の予防や対応が気になる。

【主催・お問い合わせ】登別市地域包括支援センター ゆのか

【お問い合わせ先】あけぼの(愛称) ゆのか

82-5005 83-0511 88-2106

11月11日には、各地域包括支援センターが「介護の日」～地域で自分らしく元気に暮らそう～をテーマに“介護予防”に関する催物を行います。時間と場所をご確認の上、お気軽にお越しください。参加はすべて無料です。

地域包括支援センターゆのかは、登別市民会館を会場に10:00~12:00で行います。

内容は、1. 表情イキイキの口腔体操、2. イキイキ美人の栄養学です。講師の方をお招きして、“自分らしく元気に暮らす”をポイントにお話ししてもらいます。事前申し込みは不要ですが、ご不明な点などありましたら、地域包括支援センターゆのか 88-2106までお問い合わせください。多数のご参加をお待ちしています。

ブルブルケに出会う

アイヌ語地名を訪ねることは、とても楽しいことです。それは、いま人気のフットパスウォーキング、またオリエンタリングなどの楽しさとは、おそらく別種のものでしょう。北海道の地名ほとんどが、アイヌ語を祖形としているので、あちこちにそんな楽しさはころがっているわけです。

登別川を遡ってみたことがあります。秋鮭のように、河口からジャブジャブ上流を目指したのです。川は昔から、アイヌの人たちにとって「海から入って山に行くもの」と考えられてきました。このような川に対する正反対の考え方を、体感したくなったのです。そんなわけで、酔狂な仲間が河口に集合しました。そこは川の「ゴール地点」であり、のっけから悩ましいことになりました。

可能な限り川岸をたどって歩きたい、一行のひそかな願いでした。しかし歩き始めてすぐ、それは断念せざるを得ないことがわかりました。とくに高速道路の高架橋を見上げるあたりから、凝灰岩をえぐる谷が陰しくなったのです。

灰白色に濁った川中や石原を、一時間ぐらい歩いたところでしょうか。左手にきれいな枝川が入り込んでいて、ちょっとした中州のような地形に出ました。それから、その乾いた少し小高い砂地を歩くことにしました。その枝川は川幅約 1 メートルぐらいで、水深はないに等しく、砂粒の移動がよくわかるほどの清流です。

じき小さな沼のような、あたりによく露の茂った静かな湿地帯に出ました。その水面をながめっていると、あちこちに湧き水がポコポコと吹き上げ、砂を踊らせています。ブルブルケでした。おおよその広さは畳二十枚ほどを敷き詰めたぐらいで、深い谷底なのに、そこだけは妙に明るいのでした。

いつも持ち歩くアイヌ語地名の手引き書には、ブルブルケのついた地名が登別川に三例紹介されています。まずブルブ

ルケピラとブルブルケハツタルが隣接しています。ブルブルケピラは「ブルブルケ・ピラ（清水が湧き出ている・崖）」、ブルブルケハツタルは「ブルブルケ・ハツタル（水の湧き出している・淵）」と解釈されています。この踏査から、ブルブルケとは地中から水が湧いてくるようす、その動きを表現したことばだと実感できたのは、なんとも大きな喜びでした。

地図を見ると、そこは札内台地が落ち込む崖下にあたっています。広い台地からの伏流水が、そこで噴出しているのでしょう。温泉の硫黄分で濁った登別川に、毎年サケの遡上が見られるのは、考えてみれば不思議なことです。おそらくブルブルケのような支流が、何本も入り込んでいるからなのです。

あと一例のブルブルケ地名は、大湯沼の外輪山である日和山につけられています。そこはブルブルケヌプリと呼ばれています。手引き書には「ブルブルケ・ヌプリ（もくもくと煙をふいている・山）」と紹介されています。

地中からの湧き水と噴煙、アイヌ語ではどちらもブルブルケなのです。その様態は違っていても、地霊からアイヌモシリに届けられた贈りもの、そう考えてのことでしょう。ひよっとするとそれは、縄文時代から続く擬態語なのかもしれません。

ブルブルケからの行程はもう少し続きます。それは次回にしたいと思います。

(9・03、地虫)



雨あがりのブルブルケ・ヌプリ(日和山)。

編集雑感

先ごろ待ち望んでいた道々倶多楽湖公園線の登別温泉紅葉谷区間の切替改良工事の完成が間近となり、それに先がけて仮開通が始まった。紅葉谷の深く切り立った岩壁に新しい道路を築造する無類の難工事を新しい工法を駆使して挑んだ結果の制覇であり宿願の道路の改良が実現したことに対して心から拍手喝采を送りたいと思います。

これまで紅葉谷区間の狭く急勾配できついカーブによって当院の患者様や同伴者及び救急隊等の出入関係者の方々は特に冬期間における車輛の運転に際し恐怖による極度の緊張感を強いられてきたことから長年に亘って大変なご苦勞をおかけして来たと思います。道路の改良によって大きく緩和され安心感をもってお越し頂ける道路環境となることは当院にとって大きな課題の解消になり嬉しい限りであります。

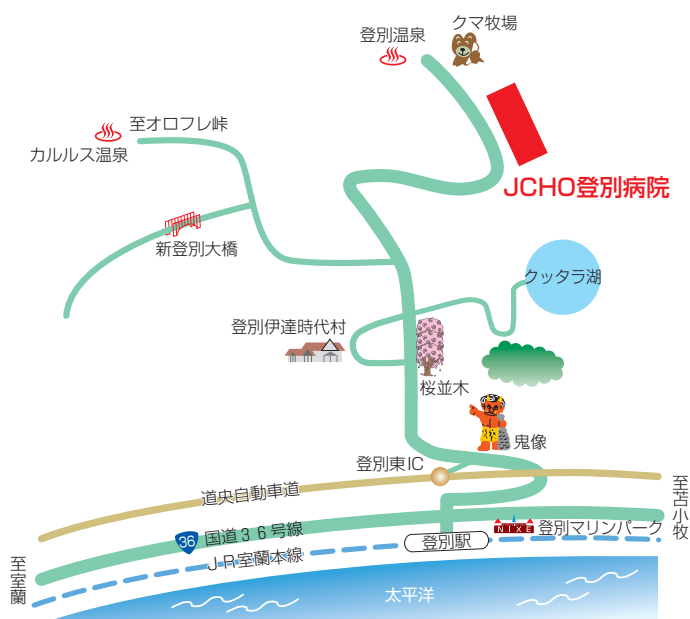
道路の改良の実現に長年ご尽力頂いた関係者の皆様に感謝と敬意を表します。

新しい道路は景勝紅葉谷の景観にも配慮されており眺望も格段に良くなり観光スポットとしての評価が一段と高まると思われるのも嬉しいことです。

涼やかな風が吹いて秋の近づきを感じる時期となりましたが今年は紅葉谷の紅葉を安全運転に留意しつつ車窓から十分堪能できることを期待したいと思います。

<各交通機関>

- JR登別駅下車（特急列車停車）登別温泉行きバス（病院前下車徒歩2分）
- 札幌－登別温泉高速バス（終点下車徒歩10分）
- 道央自動車道：登別東インターより7分



(公財)日本医療機能評価機構認定病院
総合リハビリテーション承認施設

ジェイコー
JCHO 登別病院

独立行政法人地域医療機能推進機構登別病院

〒059-0598 登別市登別温泉町133番地
TEL(0143)84-2165 FAX(0143)84-3206
<http://noboribetsu.jcho.go.jp>
main@noboribetsu.jcho.go.jp

出版責任者 院長 井 須 和 男
編集長 事務部長 森 田 克 徳